

古 郡 城 童 子 謡

1972.5.30-6.15.

番題に「古郡城童子謡幼王琴郭樂集」3158(20802,02357)がぬれ。

那城廿
暮塵起
探黒丸
研文吏
棘爲鞭
虎爲馬
圉圉走
鄰城下
切王劍
射日弓
之のまちか
埃たつ暮
黒いクジヒキ
文官を斬る
棘が鞭
虎が馬
どんどん走る
鄰城を
王を切る劍
日を射る弓

獻向人
奉相公
扶轂來
閻古兒
香掃塗
相公歸
武者ども
道き上め
大臣お帰り

劉氏翁は「一ことくへは刺意をさとらずといえども、ついに一々古語、愛すべし」と評する。筋古な味わいの愛すべきことも確かに、諷刺の意がどこにあるのかわかりにくいことも確かに、「ういうこと」をすらりと言つてのける劉氏を、わたしは信用する。いまのわたしにも、この詩がすっかり透明だというわけではない。ただ諸注家のとった視点をすこしずらして眺めると、わざりにくいところがほどけて来やうな気がする。そこをダメ押しして、読者の批判をえたいのだ。

二

テキストに異同がある。頃の「古鄆城童子謡効王翼刺曹掾」を「樂府詩集」（中津浜涉影印北京圖書出版社北宋本）等は「鄆城童子謡」とする。「刺」は「刺」のあやまりだが、この種のまざれ

に板本にはつにあら。たゞ金刊本等に「」の二字がまつたへとへた。これへた。これがよい。次に詩の本。『那城中』の「那」を他本はみな「那」とする。陳校は北本が「那」とするのを誤だとする。はたしてやうか。わたしは「那」のほうがよいと想う。「謡起」の「那」を宋画本等が「那」とし、「蘿葉丸」の「那」を『樂府詩集』・『金刊本等は「那」。『江王劍』の「那」をみな「那」とし、『關山記』の「那」を『樂府詩集』・『金刊本等は「那」。本は「那」とする。

三

〔謡〕

一九四八年一月、凡例につきのようにつづく。

「謡」二字の本義、ひおの事體の性質あり。ただし、謡は徒歌と訓す。今本説文には謡字な
る。桂氏讀の説文義證によれば、謡は徒歌なり。載同の六書表は舊本を引いて曰く、謡は徒
歌なり。桂氏讀の説文義證によれば、謡字の末に補い、且つ由其公讀および一切經
説文に引く説文に、謡は獨歌なり、べからむに考り、以て其の説を証す（歌とは歌謡の謂）。
歌謡には歌と訓す。言とは直書の謂。直書は即ち径書。径書には平歌と呼ぶ。歌
に平歌にして歌とされた。歌は歌謡の別名なり。しかばども二者は互に關係する。

体格にはだしくは懸殊せず、故に文を對すれば則ち異り、文を較すれば則ち通す。彼此を以て互訓すべし。（國語越語下、諺に「これ有り曰く、章注に云う。諺は俗の善謡なり。孟子梁惠王篇趙注に云う。晏子、夏禹の世を道う。民の諺謡なり。焦氏傳の正義に云う。俗に伝聞する所。故に民の諺謡と云う。而してその詩、歌詩の如くんば、則ち謡の類なり。）……✓

ヘ謡の名目にはだ多し。大綱について「これを言わば、ほゞ教訓あり。」の故に或いは堯時謡、周時謡と称し、或いは秦時謡、漢時謡と称す。これ時を以て標題となすものなり。或いは長安謡、京師謡、王府中謡と称し、或いは郡郡謡、二郡謡、天下謡と称す。これ地を以て標題となすものなり。或いは軍中謡、諸軍謡と称し、或いは民謡、百姓謡と称し、或いは童謡、兜謡、女謡、小兒謡、鶯兒謡と称す。一世人を以て標題となすものなり。✓

要するに民間でうたはやされるものが謡であり、そのうたいてが童である。ただ、童謡として現存するものを見ると、日本のいわゆる童謡のようではなく、おおむね時政を鋭く諷刺するものである。童をわらべと見るならば隠れみのであろう。あるいは童はわざあざ、すなわち大庭玉入のたぐいをナシ、からうが歌うたの中に民衆の感情や思考をもリ一人でやんと喝采を博したたぐいのものであろう。

鄴城はいまの河南省臨漳県の西二十里にあった。後漢末の建安九年（二〇四）八月、曹操が袁尚を破つて取り、やがて「二二」をかれの根據地とする。十五年（二〇九）、銅雀台を築いた。

「鄴城童子謡」と「古鄴城童子謡」と、どうか實の名づけかたとしてふりかしこか、「古鄴

城童子謡」だ。一のうたは後漢の作でなく、鄆城の童子の作ではない。唐の人李賀が、後漢の鄆城童子謡になぞらえた作である。中国の詩人が古歌になぞらえるのは、おおむね昔のことにおける人で今の事を諷諭するのだ。賀が題に「古」の字をかぶせるのは、古事を古事としてうたうのでないという意思の表示であり、諷刺された權力なしし暴力が力をもって尊圧してくるときには、これは古時をうたうものだとそらす防壁だ。歷代の民衆が權力を刺すことばに童謡と名づける智慧を「二」ではさうに「古」の字に生かしたのだ。

「効王祭刺曹操」があるのがよいか、ないのがよいか。「これはなけれども、上の「古」の一字を具体的に裏開してみせたのがこの六字だからである。ところどころに問題が二つある。第一は、「効王祭曹操」として「刺」字を全くテキストがあることである。それならば「王祭と曹操に効う」であろう。両者を並列するなら、王は曹の臣であつたから、順序が逆である。逆にすべき理由があるようには思えぬ。

第二は「効王祭刺曹操」をどう訓ずるか、である。鈴木注はへ此詩は王祭が曹操をそしつたのになろうて作った鄆城童子の謡で、曹操の權勢ぶりをのべた詩である」といへ王祭は魏の代の人、建安七子、鄆中七子の一人にかぞえられた。王祭に曹操をそしる詩があつたかどうか、今はわからぬが、作者の時には有つたとみえる」という。鈴木注は「王祭の曹操を刺るに効う」と訓するのである。官板は「效王祭曹操」とするが（なお、なじの義のときは効より效字のほうが正しい）呉正子の注に「一本云、效王祭刺曹操」といへ、その返り点が上のようであるから江戸の

儒官も同じように訓じたとみえる。斎藤注は「王粲が曹操を刺しに效ふ」と訓じへ王粲にそんな作品があつたかどうかわからない。現存残っている作品には、やんなんものは見当たらぬ」という。

わたしは「王粲に效いて、曹操を刺る」と訓じたい。理由を次にのべる。

四

晋の陳寿の『三国志』卷二十一に王粲の伝がある。

王粲、字は仲宣、山陽高平の人である。曾祖父の禪、祖父の暢、みな漢の三公であった。父の謙は大將軍何進の長史となつた。何進は屠殺者の家の出で、妹が靈帝の皇后となつたため成り上つたのだ。家柄のよい王家と結びたいと考え、二人のむすめを見せ、どううでも状んでほしいといつた。謙は承諾せず、病氣を名目にして辞職した。中平六年（一八九）董卓は少帝を廢して弘農王とし、九歳の獻帝を擁立し、翌初平元年（一九〇）都を洛陽から長安に遷した。このとき粲も長安に徙つた。当時、その才学によつて朝廷に重きをなした蔡邕が粲を見出し、十七歳で黃門侍郎を命ぜられたが、長安が乱れているのでつかず、荊州につき、同鄉人の軍閥劉表の幕客となつた。粲は小男で容貌もすぐれないので劉表は重んじなかつた。表が死めると粲は表の子の劉琮にすすめて曹操に帰服させた。曹操は粲を丞相掾とし聞内侍の爵位をあたえた。のち軍謀祭酒にうつり、曹操が魏王となると、粲は侍中となり、割麥丈物の制定改廃は粲の意見によつて決定され

ること多かったという。建安二十一年、曹操に従って吳を伐ち、翌二十二年（一一七）春、道中で死んだ。四十一歳。著した詩賦論議はほとんど六十篇、という。

清の嚴可均が校讎した『全上古三代秦漢六朝文』に收める王粲の文は四十五篇（五十首）民国の丁福保が編纂した『全漢三國晉南北朝詩』に收める詩は十五篇（二十六首）うち一篇（三首）は重複する。あわせて五十九篇、すなわち、ほとんど六十篇と、このと符合する。このうちには断片もかなり含まれる。また、この外に『尚書問二卷』『漢末英雄記十卷』『算術』、重複するかもしだれぬが『書數十篇』が、『魏晉志』『後漢藝文志』に著録され、『魏國登歌』『魏國安世歌』『魏制度』が同じ人の『三国藝文志』に著録される。これらはみな亡びたけれども、唐代にはなお全部あるいは一部のこゝでいるものもあったらしい。亡びたもののなかに曹操をそしめた作がなかったと断定することはできぬ。しかし粲の伝を読めば、鶴鳴を除けば粲の才能を評価したのは曹操であった。粲が、曹操と敵対關係にあった劉表に仕えながら、表の死後、表の子を説いて曹操に歸服させた。現存する粲の作品は例外なく曹操を救せの英雄としてたたえる。王粲の死後、粲の三子が政争にまきこまれて死ぬと遠征中の曹操が聞いて「おれがあつたら粲の孫り手を無くしたりはしなかつたのに」と殘念がつたという。これらのことからして、粲に、曹操をそしる作などはなかつたと考えるほうが事実に近いであろう。

粲の詩が、それではなぜ「王粲に倣う」というのか。

王粲に「後漢詩五首」がある。その一を読めば、用語に質の詩と同じものがいくつか含まれて

いることがすぐわかるだふう。そして王粲のたてているのと同じ事實を賀がやし、アーヴィングがわかるだろう。

従軍には苦しみも樂しみもあるが

誰に従うかを問うがよい

われらの従うのは神妙勇武のおかた

どうして強く軍隊に苦勞おさせになろうや

大臣どのは關右を征伐し

赫然して天威ふるい

ひとたびたつて獯育(匈奴)を滅し

ふたたびたつて羌族を征服した

西方辺地の賊を收めること

ふとうつむいて落し物を拾うようであつた

賞品は山なし

酒肉は川なし

軍中ゆたかに
人馬みな肥えた

從軍有首樂

但問所父誰

所從神且武

焉得久勞師

相公征關右

赫然震天威

一舉滅獯育

再舉服羌夷

西收邊地賊

忽若俯拾遺

陳葛越丘山

通內踰川坂

軍中多沃饒

沃文遂作飲

歩兵も兩馬に乗つて腰廻し
手ぶらで出かけて持ちきれぬ戰利品

地を開拓すること三千里

往復はじつに飛ぶがごくくだ

歌い舞いつつ鄧城に入り

願いはかない 還うことにはなかつた

昼は大いなる朝廷について

暮にはわが家に帰る

社会人としては明るい政治に参加し

家庭人としてその自由を妨げられもせぬ
一一では禽獸も犠牲となることをいとわず

良き苗はまことにもう輝いている

頭を負うて出仕を求めた翁をひそかに慕うわたし

わがわくは愚鈍なこの病身をはげまそう

長沮・桀溺のまねをして

鋤ぐわとることなんぞわたしにはできぬ

氣ままに暮らそうといふ孔子の詩よくよく読めば

徒行兼乘還

空出有餘箇

拓地三千里

往返一如飛

歌舞入鄧城

所願復無違

靈日處大朝

日暮薄言歸

外參時明政

内不棄家私

禽獸憚爲犠

良苗實已揮

宿慕鳥鳴翁

領薦朽鈍姿

不能效沮溺

相隨把鋤犁

熟覽夫子詩

熟文選作軌

一如文選作齒

畫文選作畫

わかるだろ？　言つてることのおかしさ、が

信知所言非

法 × 一〇

王粲はその「七哀詩」に「西京　亂無象、豺虎　方に虐に遭う。……門を出すれば見るものなく、白骨　平原を蔽えり。路に飢えたる婦人あり、子を抱いて董門に棄てらる。……」とつたつた。かれの『從軍詩』の第一首は建安二十年の、第二首以後は二十二年の作といわれる。二十年たつて西京あるいは他の地に曹操の聖徳によつて無土となつたのか。「從軍詩」その五にいう

はるばると荒れた路をゆき、

悠哉涉荒路
寡寢我心愁

なよなよとわが心は愁う

四望無烽火
但見林與丘

四方をながめても煙ひとつたたず

城郭生榛棘
蹊徑無所由

ただ林と丘が見えるばかり

まちにはいばらが生いしげり
径はもはや通りもなうめ

これは、かつての西京のすがたと同じものではないか。そのような野を山を城郭を、曹操の軍隊は、「三千里」開拓し、手ぶらで出かけて持ちざれめ戰利品をたずべえ、往復飛ぶがごんぐ、

歌舞して都城に入る。賞品は山なし、酒肉は川なし、軍中いたかに、人馬みな肥えた。

その賞品、その酒肉は、どこから運んできたのか。生産に従事せぬ軍中の人馬がめたかに肥えるためには生産に従事する民は、そのかまどに火を通わせることもかなうまい。かれらが軍中の賊とよんで討ちまくった人たちは、煙火をうばられて流亡した農民たちではなかつたか。

五

賀の作にかえろう。

「邪城中 幕裏丸 探黒丸 研文吏」はすでに眞正子が注したように『漢書』酷吏伝の尹賞に關する文をそのまま用いている。

漢の成帝の永始（BC一六一—三）元延（BC一二一九）のころ、天子は政治をおこしたり、賞族や外戚が勝手きよまにふるまい、あるものけ暴力団と結び、逃亡した犯罪人をかくまつた。そのため長安にはやくざがふえ殺し屋が横行した。かれらは強丸をくじにして役割をきめ・赤丸をひくと武官・黒丸は文官・白丸は死体処理とした。城中は薄暮になると塵まいてかれらが行く人をおそい・死者や負傷者が道にあふれ・警報の絶え間がなかつた・という。

賀の四句の意は、漢の成帝の世をそのままに暴力団が人を殺しまわっているのは、いつにいどこのまちなのか、というのである。

さきに記したように、「那」を他本はすべて「鄭」とする。「鄭城童子謡」だから「鄭城中」とうたい出すことは、もともとらしいけれども、題もまた作品のうちというのが六朝以後のおおむねの詩人の常識である。題にいい、初句にいい、八句にいふのは、この短詩の場合、くどすぎる。初めから鄭城と時处を指定したのでは『漢書』を引いたことさえ浮わついてしまう。

「森爲鷹 虎爲馬 團團走 鄭城下」 いばらを駆とすることはどういうことなのか。やはり、『漢書』の京兆尹（都知事）として剛直をもって知られた王尊の伝に「上は功を以て罪を除くを得ず、下は株木の聽を得ず」の語がみえ、張晏の注に「周礼に、三槐九棘は公卿、下は訟を聽く」という。株木は訴えを聞く場所である。株はまた矛のことをさす。いずれにしても訴えをきき、刑を行なうべき立場にあるものがやくざを使つて殺人を行なへるとすれば、警察権が殺し屋の武器である。宇貴の伝では、やくざをほうりこむ獄を虎穴と称したというが、虎穴に入るべき連中が城下を駆馳するのは「虎を馬となす」ではないか。大臣などの息のかかた暴力団が、その権力を傘にきて走りまわる、それが鄭城なのだ。

「切玉劍 射日弓 猛何人 奉相公」 切玉劍はそのままでも通るけれども、次の句と對するものとしては化本がみなそするように、切玉剣とするのがよいであろう。

周の穆王が西戎を征したとき、西戎が銀鎧の剣を献じた。その剣で玉を切ると泥を切るようだつた、という話が『列子』湯問篇にみえる。また、十の太陽が出て地上の草木が枯れようとしたとき、羿が九つの太陽を射おとした、という話が『淮南子』本經訓にみえる。

それらの宝劍・宝弓を、暴力団がうばつてくる。そつて大臣どのにたてまつる。

「扶轂來 閻右兒 香掃塗 相公歸」 轄は車・ヤキの王尊伝に「賊数百人、轂下に在リ」の句があり、義師古の注に、賊の多数が天子のみ車のもとにいる。すなわち賊が天子に近づいていることだ、という。ところで「一」の車の主は天子ではない。その車を守るものは閻右、すなわち閻西、すなわち古来武勇をもつてなる陝西の将兵であり、かつて曹操に攻められた武人である。いまやその武勇の軍人たちも、天子ならぬ大臣の車をまもり、人民の影もどどめぬまでに一物もなくなつた道を、しすしづと大臣どのが帰る。

六

近来、曹操は大いに見直された。永久に悪玉で曹操も浮げまい。曹操は詩人であり英雄であり、俗談巷説の「曹操」とおさらばする。しかし「曹操」はいつの世にもいて「黄巾の賊」をけちらし「幼帝」を擁して天下に号令する。「王家」のよう方頌歌者はことかかず、「孔融」のよう方諷刺者は殺してしまえばよい。李賀がこの詩でうたつたのは「曹操」であつて曹操ではない。この詩の題を「古鄆城童子謡」と題するのは、古事によつて今事を諷刺するのだ、とさきにつた。それでこの作のやしる今事はなにか。

姚文燮は、順宗朝の王叔文党をさるものと見、また、しかし則天武后中宗の朝廷で国柄を奪あ

とする者の少くなかったことなどから、唐代を通じてのそのような往事を歌じたのであらう、といふ。賀が王叔文党を師の轄愈のように蛇蝎視したとも思えぬが、一一〇のところはもう少し考えた上でないと何ともいえぬ。むしろ元和十年、宰相武元衡が路上で暗殺された事件に觸発され、その翌十一年、潞州から昌谷への帰途にでも都城を通過したとき、作つたのではないか、と想像する。ところが賀の晩年、つまり元和十年（ハ一五）から十二年（ハ一七）にかけての、かれの動静がもう一つすつきりとわたしの頭の中でおちつかないので、この想像をおしそすめることができない。

ただ、この詩を一つの事件に結びつけるよりも、もゝ普遍的なものとして読むことがで、その方がよいのではないかといふ気がする。

走

馬

引

1972.6.17-7.1.

「古事記童子謡」を読むと、李賀の暗殺者に対する怨恨は否定的であるようにもみえる。だが「春坊正字の劍子の歌」105(20659)には、

先輩匣中三尺水
舊入深潭斬龍子
陰月斜明刮露寒
練帶平鋪吹不起

蛟脂皮老篆篆刺
鶴鷗淬花白鷗尾
直是荆軻一片心
莫教照見春坊字

按金匱寶鏡
神光欲試藍田玉
提出西方白帝鸞
嘆歌鬼母秋娘哭

「血虎行」5232(20876)

火鳥日暗崩騰雲
秦王虎視蒼生群

火の鳥 日は暗く 燐えたつ雲 前れおち
秦王は 虎のノノノ 民衆を監視する

先輩が匣に秘めた 三尺の秋水刀
かつて吳の潭に入り 竜子を斬つて
陥もる月ときらめいて 線縄の帶吹いても起だぬ
あけばひたりと 鮫皮の鞘の色古り
山鳥の尾のながと 鳴の脂に銛のめでたゞ
暗殺者荆軻のこれぞ ひとすじの雄心だ
けつして照して見るでない 東宮の文書なんぞを
組紐につけた黄金の飾りだますしり垂れて
光いみじく 藍田の玉もすぱり切れようもの
そいつひつ揚げ西に向えば 白帝たまげ
おうおうと その母の鬼女 秋の野に哭べりだるゝ 母一作姑

鶴皮脂一作鶴老皮
一作鮫老皮
鷗一作鷗
直一作真
莫教一作分明一作
絆一作垂

燒晝滅國無暇日
鑄劍佩玦惟將軍
玉壇設醴思冲天
一世二世當萬年
燒丹未得不死藥
寧舟海上尋神仙
鯨魚張鬚海波搏
耕人半作征人鬼
雄豪氣猛如焰煙
無人爲決天河水
誰最苦今誰最苦
報人義士深相許
漸離擊筑荆卿歌
荆卿把酒燕丹語
劍如霜今朧如鐵
出燕城今望秦月
天授秦封祚未終

燒晝滅國無暇日

鑄劍佩玦惟將軍

玉壇設醴思冲天

一世二世當萬年

燒丹未得不死藥

寧舟海上尋神仙

鯨魚張鬚海波搏

耕人半作征人鬼

雄豪氣猛如焰煙

無人爲決天河水

誰最苦今誰最苦

報人義士深相許

漸離擊筑荆卿歌

荆卿把酒燕丹語

劍如霜今朧如鐵

出燕城今望秦月

天授秦封祚未終

書物燒き、六國を滅して暇なく

兵器あらにに鑄造し決意きびしく將軍を召す

宝玉の壇上に夜の祭りし意氣天をつき

一世二世かくて万年皇統を伝えるつもり

丹砂焼いても不死の薬は得られはせぬ

舟だして海上に神仙の国をさがせる

鯨がひれ入り海の波わき水夫あほれ

農耕の民の半ばも出征し幽鬼となつた

炎あげ煙あげ燃えやかる景観を

天の河の水きりあとし消す人もなし

最も苦しむものに誰か最も苦しむものは誰

信じる人に報いようと義士ふかく相許し

高漸離筑をうち荆どのは歌うたう

荆どのが酒のみせば燕の太子丹語る

霜のごときかな劍鉄のごとき膽

燕の都をいでたつて秦の月のそみみる

天は素に国土を与え帝運はいまだ尽きず

惟一作呼

設一作祝

拂一作拂

一作雄豪猛烈燒空

膽一作腸

封一作風
末一本
祚一作移
一作衷

袞龍衣點前卿血

袞龍の衣にとじかる 刑との血

朱燒卓地白虎死

朱の旗 地に卓立し 白虎 死ぬ

漢皇知是處天子

漢王ハニヤ 知るがよい 仁マニと真マニの天子かハニヤ

虎アシカ一作蛇
皇アマニ一作王アマニ知アシタナ一作却アシタナ

之暗殺者荆軻をたたえる。「白虎行」は頭の行として「疑わしいが、「春坊正字劍子歌」」だけでも、荆軻に対する好意は十分に読みとれる。や、今に「走馬引」1044(20688, 01529) がある。

我有辭鄉劍

おれ、まの 郷里クニにおさげばする劍

玉鋒退武雲

切ハサウエ先ハサウエは 浮雲ヒツキもぶつた斬ハサウエるのハサウエだ

襄陽走馬客

襄陽ヒツヨウに馬ヒツヨウを走ハシメテうすますハシメテう

意氣自生春

意氣ヒツギおのずから春ヒツヨウとなる

朝嫌劍光淨

氣ヒツギにくわぬ 朝ヒツヨウの劍ヒツヨウの光ヒツギの淨ヒツギさ

暮嫌劍光冷

氣ヒツギにくわぬ 暮ヒツヨウの劍ヒツヨウの光ヒツギの冷ヒツギたゞ

能持劍向人

持ハサウエてやるハサウエのは人ハサウエにはむかう劍ヒツヨウけえだ

不解持照身

しゃらくハサウエやハサウエい わが身ヒツヨウを照ハサウエらすことなへど

李賀自身が暗殺者になつてうそぶいてゐるみたいだ。